

論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

堀江 良樹

主論文の題目
および
掲載誌・審査委員

題目 Predictability of antitumor efficacy of cetuximab plus irinotecan based on skin rash severity according to observation period in patients with metastatic colorectal cancer following failure of fluorouracil, irinotecan and oxaliplatin
(フルオロウラシル、イリノテカンおよびオキサリプラチン不応後の進行結腸・直腸癌患者における、セツキシマブ+イリノテカン療法の皮膚毒性による効果予測の観測期間による違い)

掲載誌 Molecular and clinical oncology 2015 ; 3: 1029-1034

主査 大坪 毅人

副査 安田 宏

副査 川上 民裕

[論文の要旨・価値] Cetuximab(Cmab)は大腸癌化学療法の Key drug であり、塩酸イリノテカン(CPT-11)+Cmab は標準治療の一つである。Cmab の全治療期間中に Grade2 以上の皮疹が認められた症例は治療効果良好で、臨床的なバイオマーカーになるといわれているが、効果予測のための適切な皮疹の評価時期は明らかでない。そこで Cmab による皮疹と治療効果の関係を明らかにしようとしたのが本研究である。2008 年 9 月から 2009 年 12 月までに大腸癌に対し化学療法を施行した症例のうち KRAS exon2 (codon2, 3) 野生型で Cmab+CPT-11 療法 (Cmab は初回 400mg/m²、以降 250mg/m²、毎週投与、CPT-11 は 150mg/m²で隔週投与) を行った 33 例を対象とした。全治療期間および 2、4、6、8 週までに Grade2 以上の皮疹が出現した群と出現しなかった群で無増悪生存期間および全生存期間をもとに皮疹と化学療法奏効の有無について検討した。その結果、全治療期間における皮疹重症度と治療効果の関連性は再現されたが、皮疹の発現時期と治療効果について関連性は認められなかった。また、治療後 8 週時点で Grade2 の皮疹がない症例は良好な治療効果が期待できないことが結論された。以上より本論文は大腸癌化学療法における非常に有益で、学位授与に価する内容であるといえる。

[審査概要] 学位審査は教育棟 5 階セミナー室において主査、副査の他、指導教授、数名の医局員陪席のもと行われた。まず、申請者による約 20 分程のプレゼンテーションが行われた。プレゼンテーションは理解し易いもので、簡潔にまとめられていた。その後本研究の方法、結果とその解析さらには今後の展望に関する質問に対し、いずれの質問に対しても礼儀正しく、真摯な態度で概ね良好に返答していた。

最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価]

学位審査を通して、申請者は専門領域の知識、背景および関連領域の知識、ならびに本研究を実施するうえでの研究上の十分な知識を有すると判断した。

英語の読解力については引用論文一部を指定し、その場での abstract の英読、和訳を命じ、その結果十分な英語読解力があると判断した。